



とびっくす No.20

(本誌はホームページでもご覧いただけます。 <http://www.pref.shimane.lg.jp/suigi/>)

メガイアワビの稚貝を生産中

～アワビ資源の再生をめざして～

はじめに

アワビといえば高級食材として知られ、誰も一度は口にしてみたいと思う魚介類のひとつではないでしょうか。残念ながら、なかなか庶民の口には入りませんが、島根県沿岸漁業者の貴重な収入源となっています。

日本で主に食用とされているアワビはクロアワビ、エゾアワビ、マダカアワビ、メガイアワビの4種類で、島根県ではこのうち主にクロアワビとメガイアワビの2種類を漁獲しています。

アワビの放流が必要なわけ

島根県のアワビ類の漁獲量は、昭和50年～平成3年までは年による変動はあるものの100トンを超す水準にあり、生産額も平成2年には6億円を超えていました。しかし、平成3年以降漁獲量は激減し、平成8年以降若干の増加はあるものの以前と比べ半分程度の水準となっています(図1)。漁獲量が減少した原因はいろいろありますが、最も大きな理由としては、沿岸域の環境変化により、アワビにとって大切な餌料である藻場が減少したことと乱獲が考えられます。そこで、アワビの資源を再び増やす取り組みとして放流が必要となり、併せて藻場の育成が大切になっています。ここでは、まずアワビの種苗の生産から放流に至る過程について紹介します。

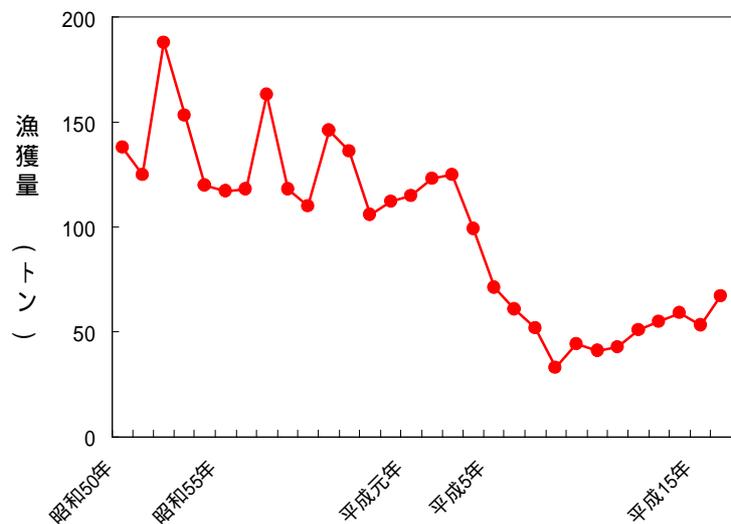


図1 島根県のアワビ類の漁獲量

これまでの生産状況

水産技術センター(栽培漁業部)でのアワビの種苗生産は、旧栽培漁業センター開所(昭和51年)以来、続けられてきています。最初は市場単価の高いクロアワビ(8,000円/kg)の生産でしたが、昭和62年頃からクロアワビに致命的な病気(筋萎縮症)が全国的に発生するようになり、

当センターでも生産不調に陥りました。そのため、平成6年から市場単価は少し低いものの病気に強いメガイアワビ(6,000円/kg)の生産に切り替え、現在に至っています。生産個数は生産開始時の昭和50年代は20~30万個でしたが、昭和60年代に入り技術が向上し、60万個前後の生産が可能となりました。しかし、近年は厳しい漁協経営を反映して、経費のかかるアワビ放流数は減少しており、今後の資源回復の遅れが懸念されます。

アワビの子育て

当センターでは、まず母貝を養成するところから始めます。母貝には天然のワカメやアラメを十分食べさせ、栄養をしっかり蓄えさせます。秋になるといよいよ採卵です。ホルモン剤の添加などはせず、アワビが自然に卵を産むまで待ちますが、アワビがまとめて産卵するよう干出させたり、温度を上げたりする刺激は与えます。最近はこの技術が向上し、ほぼ計画通りに採卵ができるようになりました。受精した卵は、約12時間(20℃)でふ化します。ふ化したアワビの幼生は繊毛で水中を浮遊しながら、約4日かけて変態し、写真2のような形になるといよいよ採苗器(波板)に付着させます。採苗器には、幼生が付着してからすぐ餌が食べられるよう、あらかじめ餌料である付着珪藻を増殖させておきます。成長して殻長が約8mmの大きさになると、付着珪藻を食べていた稚貝はワカメやアラメなどの海藻を食べようになります。アワビの成長はゆっくりで、10日で1mmしか成長しません。4~6月頃、大きさが殻長8~15mmになるといよいよ出荷です。出荷先は益田市と隠岐の島町にある中間育成場で、ここでさらに放流サイズ(30mm)まで飼育した後、県内全域の沿岸に放流されます。

これからのアワビ放流について

アワビの放流は、各地域で実施されていますが、その効果は、まちまちのようです。ただし効果が現れている地域の共通点としては、保護区を設けたり、漁獲量の制限を行うなど、資源管理がうまく行われていることがあげられます。資源量に見合った漁獲をすることにより、持続的で計画的な漁業生産が可能になるわけです。

近年、沿岸漁業が衰退しているといわれています。また、漁業就業者が著しく減少しています。この対策の一つとして、アワビ漁が以前の輝きをとりもどす手助けをするため、当センターでは日々アワビの飼育に取り組んでいます。

母貝養成 採卵 ふ化 採苗 稚貝飼育 出荷 中間育成 放流

図2 アワビの種苗生産から放流までの作業工程



写真1 母貝の放卵の瞬間、卵は緑色。

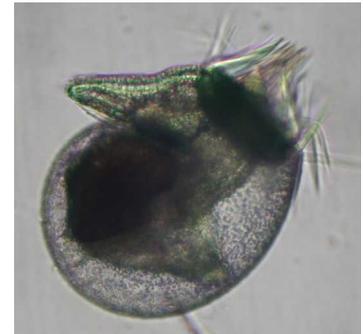


写真2 付着前の幼生



写真3 稚貝飼育作業風景